

太宰治 「斜陽」

1947(昭22)年に太宰治によって発表された小説「斜陽」は、敗戦後の混乱した日本社会で、没落していく上流階級を描いた作品として広く読まれました。この「斜陽」という題名は、没落していく上流階級の物語を示します。それと逆行するかず子のどこか歪んだたくましさだけが異質であり、それが描かれることで、母親や弟の直治そしてかず子が恋する作家上原の斜陽＝滅びのはかなさが浮かび上がることになるでしょう。

かず子と母親が、「東京の西片町のお家を捨て、伊豆のこの、ちょっと支那ふうの山荘に引越して来たのは、日本が無条件降伏をしたとしの、十二月のはじめ」で、もちろん、「世の中が変わり」、「家を売るより他は無い」という理由からです。そのかず子たちの伊豆の家でボヤが起きます。風呂場がかず子の失火でまる焼けになり、村の人たちに迷惑をかけてしまったのです。「ままごと遊びみたいな暮し方」と批判を浴びながらも、かず子はなんとかたくましく生きていこうとします。具体的な場面でいいますと、ボヤを出した翌日ですが、かず子は「畑仕事に精を出した」とありました。そして、以下のように一文を

続けます。

● Lesson 1

「火事を出すなどという醜態を演じてからは、私のからだの血が何だか少し赤黒くなったような気がして、その前には、私の胸に意地悪の蝮が住み、こんどは血の色まで少し変わったのだから、いよいよ（ ）になって行くような気分で、お母さまとお縁側で編物などをしていても、へんに窮屈で息苦しく、かえって畑へ出て、土を掘り起こしたりしているほうが気楽なくらいであった。」とあります。文中の空欄に入る最も適当な語句を、①～⑤の中から一つ選びなさい。

- ① 斜陽の貧乏娘
 - ② 蝮の醜態娘
 - ③ 野生の田舎娘
 - ④ 美貌の都会娘
 - ⑤ 畑の意地悪娘
-